企画:映画「新・あつい壁」製作上映実行委員会・全国ハンセン病療養所入所者協議会
制作:中山映画株式會社/プロデューサー:佐々木裕二/企画協力:神美知宏・志村康/脚本:横田与志
脚本協力:大竹章/詩:谿雄二/音楽:小室等/撮影:古山正/照明:清野俊博/録音:福田伸/効果:福島行朗/編集:川島章正/美術:山田好男
記録:石川恵与/助監督:山田敏久/制作主任:山岸秀起/キャスティング:北川義浩/協賛:スカイネットアジア航空・『同和問題』にとりくむ宗教教団連帯会議
特別協賛:合志市 配給:映画センター全国連絡会議

©映画「新・あつい壁」製作上映実行委員会

新・あつい壁

差別と偏見の向こうに 若者がみた真実とは

まだ駆け出しのフリー・ルポライター卓也は取材で知り合ったホームレスの男・友田から、55年前に熊本で起こった殺人事件を聞かされた。

これを取材すればいい記事になると思った卓也は知り合いの雑誌編集長福島にかけ合うが、自費で取材しろと相手にしてくれない。あきらめきれない卓也は、友田の話を手がかりに少しずつ調べはじめる。それは、ハンセン病患者が犯人とされた事件だった。卓也は熊本行きを決意する。

国立ハンセン病療養所菊池恵楓園に自治会を訪れた卓也は、当時のことに詳しい増井と佐伯から、事件や裁判についての詳細な話を聞く。それは、聞けば聞くほど、犯人とされ死刑になった男・勇吉の無実を思わないではいられない話ばかりだった。さらに卓也は、勇吉の最後の教誨師として関わった牧師・坂上から、その裁判に直接関わった書記官の証言として「勇吉さんをボロ雑巾のように死に追いやった」という話を聞く。そこにあった真実とは何か…

映画評論家　**佐藤 忠男**

中山監督は１９６５年にテレビの番組として「ある青年の出発」というドキュメンタリーを発表している。ハンセン病の元患者の社会復帰を扱った真摯な作品であった。私は当時これを見て感銘を受けて新聞に批評を書いている。それから４年後、中山監督は郷里の熊本で自主制作の劇映画の第一作「あつい壁」をつくった。自主制作の映画は必ずしも珍しくはなかったが、それが地方で行われたということはあまり前例がないので、私はその製作活動そのものに注目して私が編集していた映画雑誌で記事にして東京で上映の応援などしたものだった。そして出来上がった作品に心を打たれた。ハンセン病患者の子が学校の父兄に差別されて、学校への通学を妨害される。かつて実際にあった差別と偏見の事件である。

あれから４０年。中山監督がたゆまず差別のありかたを映画で問いつづけていることに心から敬意を表したい。差別問題を見つめる目は変わらず澄んでおり、その視野は拡がり、深まっている。

監督　**中山 節夫**

ハンセン病患者を親に持つ子ども達の小学校入学拒否問題を題材にした「あつい壁」を撮ってから４０年近くの時が過ぎました。今日では療養所の入所者と社会との交流も活発になりハンセン病やその療養所の存在すら知らなかった若い世代への啓発活動も広がり、療養所の内と外をめぐる状況は随分様変わりしました。また、らい予防法が廃止され強制隔離政策がまちがいであったことを国が認め謝罪もしました。

しかし、私たち一人ひとりの偏見や差別意識が払拭されることとは簡単にイコールにならないということを、温泉宿泊拒否事件後の療養所自治会への陰湿な中傷や嫌がらせの事実がものがたっています。

劇映画「新・あつい壁」は、ハンセン病患者であることを理由に法の前の平等を踏みにじられた５０年以上も前の事件を通して、それを許した当時の社会の意識が今日どのように変わったのか、そして何が変わらないのかを描きました。

2007年/カラー/111分/ヴィスタ・サイズ(1:1.66)/ドルビーSR/©映画「新・あつい壁」製作上映実行委員会・中山映画株式会社